

加茂遺跡第 329 次調査 現地公開資料

令和 7 年 5 月 10 日 (土)

発行：川西市生涯学習課

◆加茂遺跡について

加茂遺跡は、猪名川の右岸に形成された平野を見下ろす標高約 40m の台地の先端に位置します。遺跡の最盛期となる弥生時代中期には、東西約 800m、南北約 400m の約 20ha に及ぶ、近畿地方でも有数の大規模集落に発展します。

遺跡の東部は環壕に囲われており、方形区画を持つ大型掘立柱建物などの存在から、集落の中心的な性格を有していたことがわかります。環壕の外にも南北に居住区が存在し、それを取り巻くように墓域が広がっています。

弥生時代の集落の様相がよくわかる遺跡であり、平成 12 年 (2000) には遺跡の一部が国の史跡に指定されました。その後、平成 23 年・27 年、令和 7 年に追加指定されています。

今回の調査地点は環壕外南部居住区にあたり、過去の近隣の調査では弥生時代の竪穴建物などが見つかっています。



◆調査成果について

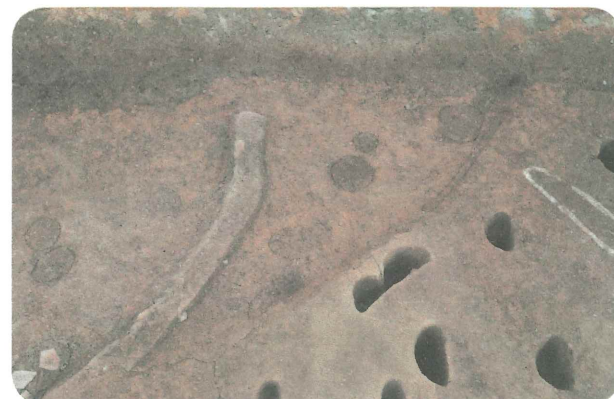
今回の調査では、弥生時代中期の竪穴建物を中心に、多数の柱穴が見つかりました。竪穴建物は、掘り込みが認められる 3 棟と、周壁溝が途切れながら弧状に伸びるものが 2 棟見つかりました。

周壁溝のみのものと建物 2 は、いずれも直径 4～5 m の円形の竪穴建物と考えられます。建物 2 も周壁溝が認められます。建物 1 と建物 3 は方形 (隅丸方形) の竪穴建物で、建物 1 は 1 辺 3.5 m 以上、建物 3 は 1 辺 2.5 m 以上あります。建物 1 は 1 m 強のテラス状の平場があり、中心部に向かってさらに掘り込んでいます。周壁溝は認められません。埋土からは多量の弥生土器が出土しました。建物 3 は、直角に曲がる周壁溝が認められます。

現段階で見ついている土器は、弥生時代中期と考えられるものばかりです。方形の竪穴建物は弥生時代後期から古墳時代にかけて多く見られる形状で、弥生時代中期のものは希少です。ただし、今後遺物整理が進めば新しい時期の土器が見つかるかもしれません。



遺構検出状況 (南から)



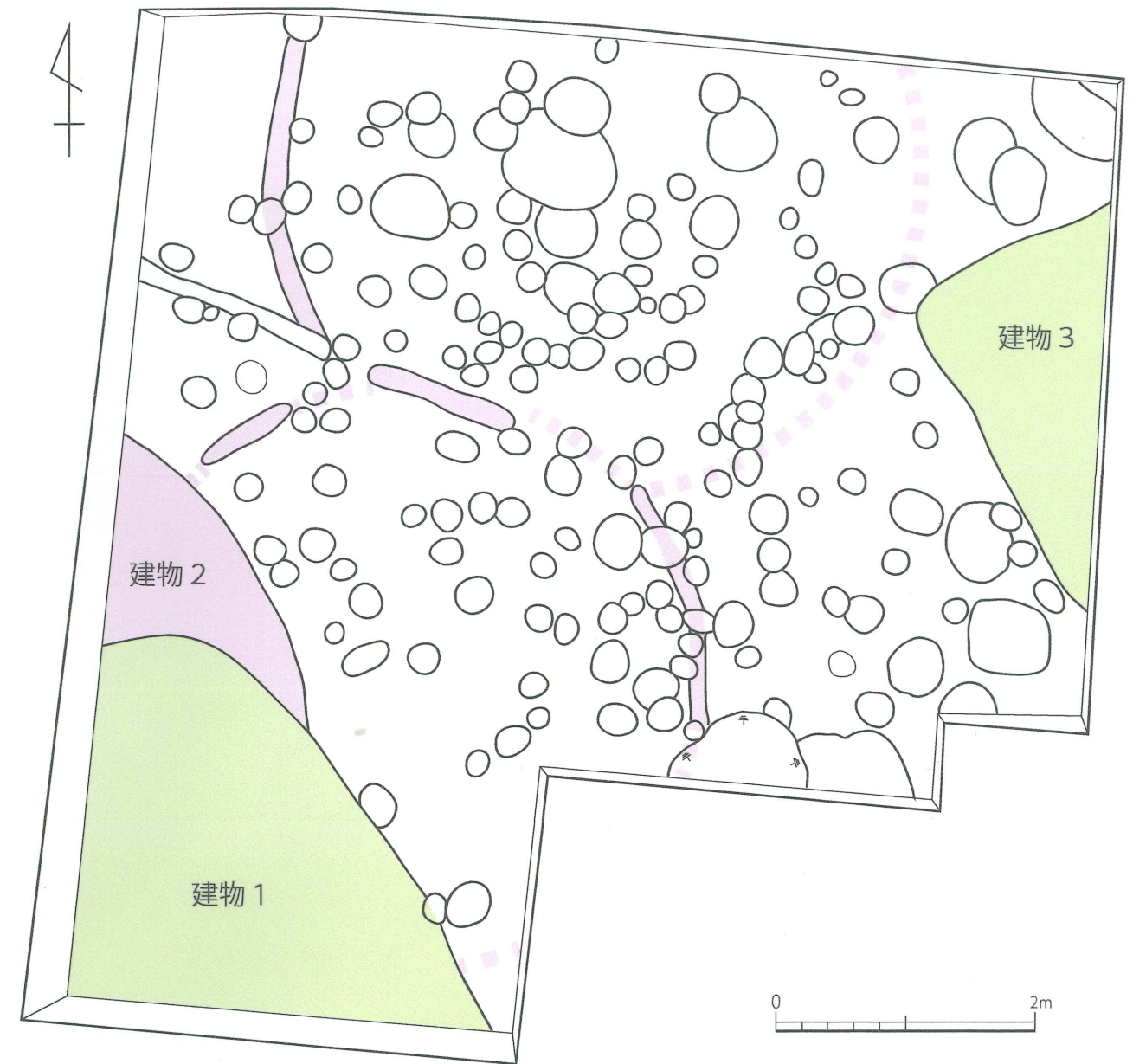
竪穴建物 2 (東から)



竪穴建物 1 (東から)



竪穴建物 3 (北から)



遺構配置略図 (S=1/50)